

本書について

本書は日本語の歴史を基礎から、やさしく学ぶためのワークブックです。

多くの方は中学や高校で日本の歴史、いわゆる日本史を学んだことがあると思います。それに対し、我々が日常話している日本語については、いかがでしょうか。

もちろん『源氏物語』や『枕草子』等の古典作品を通して古い日本語に出会ったことはあると思います。しかしそれは断片的なものであり、日本語の各時代の特徴や歴史的な流れを体系的に学んだことはないのではないのでしょうか。

そこで、本書では各時代別の資料や文法・語彙・表記・音韻、そして歴史的变化を分かりやすく学んでいきます。

また、学び方にも工夫してみました。

最近、携帯電話・スマートフォンやパソコンばかり使用して、手で文字を書かなくなっていないですか。私たちも書く機会が少なくなっていますが、書かなくなれば書かなくなるほど、覚えが悪くなったり、漢字を忘れてたり。そんなことから、テキストに直接、書き込んでもらうような体裁にしました。愛おしい日本語の歴史を、丁寧に手で書きながら覚えていきませんか。「手で書きたい日本語の歴史」ですね。

さあ、今から 1000 年以上続く日本語の歴史の旅へと出かけましょう！

【本書を使用する上での注意】

- ① 本書は日本語史をはじめて体系的に学習する大学1・2年生、日本語教育のために日本語史を学ぶ必要がある方、教養として日本語の歴史を知りたい方等を想定して編集されています。さらに専門的に知りたい方は、欄外の「注」を見て、さらに学習を進めてみてください。
- ② 用例は特に注記がないものについては、『新編日本古典文学全集』（小学館）を使用しています。なお、その他の資料は本書末の「用例出典」に示してあります。
- ③ 時代区分については、第1講で述べるように、「上代・中古・中世・近世・近代・現代」で示しますが、特に時期的に限られている場合には、院政期・鎌倉時代・室町時代・明治時代等を使用します（例：中世でも鎌倉時代ではなく、室町時代に起こった変化は、室町時代と記載）。また重要なものには西暦と和暦も記載しました。
- ④ 「上方（語）」という用語は近世の京都・大坂のことば、つまり「江戸（語）」に対する用語として使用しています（『国史大辞典』によると、「上方」の呼称は「すでに中世末に用いられていたようであるが、（中略）なお江戸が新たな政治の中心として急速な発展をするにつれて、それに対立するものとして京都・大坂を中心とする文化的・経済的な上方なる概念も生じた」とされています）。なお、本書の上方は「京都・大坂」をさします。
- ⑤ 典拠となる重要な研究については、出来る限り欄外の「注」に示しました。また、新しい研究も取り入れています。現在、日本語の研究分野で通説と考えられているものを選びました。
- ⑥ 専門用語等については、分かりやすくするため欄外にその説明を記し、「解説」で示しました。
- ⑦ 本文に出てきた事項のうち、他の講で詳しく述べられている事項は「参照」で示しました。
- ⑧ 本文中の用例のうち、解釈が難しいものについては、現代語訳をつけ、「訳」で示しました。
- ⑨ 節見出しは色が薄いものが「基礎編」、濃いものが「応用編」となっています。
- ⑩ 空欄について、「 」には一般の用語、『 』には書物や文学作品の名称、【 】には時代区分、年代、年号に関する用語が入ります。1つの講の中で同じ番号の空欄には同じことばが入ります。

目次

■本書について…2 ■本書を使用する上での注意…3 ■キーワード一覧…6

第1講	総論 ……10
第2講	日本語の一番古い姿（上代） ……14
第3講	書きたい！日本のことば ……18
第4講	酒＝「サケ」、酒屋＝「サカヤ」 ……22
第5講	王朝文学、花開く（中古・和文資料） ……26
第6講	漢文力！（中古・訓点資料） ……30
第7講	「いろはにほへと」は諸行無常 ……34
第8講	漢文訓読・和文のことばと、古代語の色 ……38
第9講	起く・起くるとき・起くれば ……42
第10講	食ひつ、食ひき、食はむ ……46
第11講	「ぞ」がきたら文末は連体形！ ……50
第12講	武士の時代へ（中世前期） ……54
第13講	狂言・抄物・キリシタン資料（中世後期） ……58
第14講	モジモジことば ……62
第15講	庶民の文化、栄える（近世） ……66
第16講	「こんにつた」「ねんぶっと」 ……70

第17講	一段化、完了！ …… 74
第18講	武士・江戸っ子・遊女のことば …… 78
第19講	国学者たち …… 82
第20講	文明開化(近代) …… 86
第21講	君、近代のことばを学びたまえ …… 90
第22講	吾輩のウォッチであとテンミニッツ …… 94
第23講	現代にも起こっている変化 …… 98
第24講	「標準語」はつくられた？ …… 102
第25講	発音の変化のおさらい …… 106
第26講	「おほね」から「だいこん」へ …… 110
第27講	日本語の分析的傾向 …… 114
第28講	古代語に「です」「ます」はなかった …… 118
第29講	頼み方、謝り方の歴史 …… 122
第30講	こ・そ・あ …… 126

■あとかぎ ……130 ■用例出典 ……130 ■掲載図版一覧 ……131

▶キーワード一覧

NO	講名	項目	キーワード
1	総論	時代区分、日本語を知る資料、話しことばを探る、日本語はいつから？、漢字の伝来、神代文字という考え	文字資料、口語資料、稲荷山古墳出土鉄剣銘、神代文字
2	日本語の一番古い姿（上代）	時代背景、『万葉集』の読み、東歌・防人歌、上代の資料についての言及一本居宣長『うひ山ぶみ』、『万葉集』の「戯書」、その他上代語の資料	万葉仮名、東国的な要素、『新撰字鏡』
3	書きたい！日本のことば	万葉仮名、上代特殊仮名遣い、本居宣長・石塚龍麿・橋本進吉、平仮名・片仮名の発生、宣命書き	万葉仮名、甲類・乙類、音仮名・訓仮名、『仮名遣奥山路』、草体
4	酒＝「サケ」、酒屋＝「サカヤ」	古代語の音節構造、母音連続の回避、単音節語、露出形と被覆形、子音交替・母音交替、母音調和	拗音、撥音、促音、長音、母音融合、子音挿入、母音脱落、一音節語、阪倉篤義、同音衝突、有坂・池上法則
5	王朝文学、花開く（中古・和文資料）	時代背景、平安初期、平安中期、本文異同、『枕草子』の諸本、『土左日記』、平安後期・末期、説話集『今昔物語集』	国風暗黒時代、訓点資料、片仮名宣命体、『東大寺諷誦文稿』、和文、自筆本、異同、『枕草子』能因本系統本・三巻本系統本・前田家本・堺本系統本、『土左日記』藤原為家本・藤原定家本、『今昔物語集』鈴鹿本
6	漢文力！（中古・訓点資料）	漢文・漢詩・訓点資料、和化漢文（変体漢文）、訓点資料、加点とは？、和文資料と訓点資料、訓点資料を読んでみよう！	六国史、『御堂閔白記』、南都、ヲコト点、片仮名、漢籍、国書、『金光明最勝王経』、『地藏十輪経』、『大慈恩寺三蔵法師伝古点』、点図
7	「いろはにはへと」は諸行無常	ア行の「エ」とヤ行の「エ」、音便、撥音「ん」の表記、現代語のヘボン式「ん」、促音「っ」の表記	あめつち、ために、いろは歌、『金光明最勝王経音義』、五十音図、『孔雀経音義』、イ音便、ウ音便、促音便、撥音便
8	漢文訓読・和文のことばと、古代語の色	訓読特有語・和文特有語、作者は男性！？、日本語の色名、色の伝統的な対立、アオとアカ、『万葉集』のミドリ	『土左日記』、紀貫之、『竹取物語』、白・黒・赤・青
9	起く・起くるとき・起くれれば	動詞の活用、形容詞・形容動詞の活用、活用に起きた変化、形容詞の活用と意味、活用語尾に含まれる「あり」	強変化動詞、弱変化動詞、ク活用、シク活用、終止形・連体形の合流、二段動詞の一段化、カリ活用、ナリ活用、タリ活用

NO	講名	項目	キーワード
10	食ひつ、食ひき、食はむ	古代語の助動詞、古代語のアスペクト・テンス、助動詞「り」、なぜ、已然形と命令形?、「たり」から「た」へ	ヴォイス、アスペクト、テンス、モダリティ、文法カテゴリー、完成相、結果・効力の継続、テ形補助動詞
11	「ぞ」がきたら文末は連体形!	係り結び、「が」と「の」と「を」、準体句、連体形終止	係助詞「ぞ・なむ・や・か・こそ」、強調、疑問、主格、属格、接続助詞、ヒト・モノ
12	武士の時代へ(中世前期)	中世前期・後期の時代背景、文体一院政期から鎌倉時代へ、軍記物語『平家物語』、中世前期の資料、仏教関係の資料、平仮名と片仮名、『方丈記』、定家仮名遣い	和漢混淆文、『平家物語』読み本系・語り本系、真名本、親鸞、日蓮、明恵、『新撰髓脳』、『方丈記』、大福光寺本、『池亭記』、藤原定家『下官集』
13	狂言・抄物・キリシタン資料(中世後期)	中世後期の文化、狂言、奈良絵本・節用集、抄物、東国資料、外国資料—キリシタン資料、キリシタン資料、外国資料—朝鮮資料『捷解新語』	『大蔵虎明本狂言』、手控、聞書、『史記抄』、『四河入海』、東国抄物、『日葡辞書』、ロドリゲス『日本大文典』、『天草版平家物語』、『天草版伊曾保物語』、『懺悔録』、サ行のセ
14	モジモジことば	中世の語彙、女房ことば、女房ことばが現れる資料、広がる女房ことば、近世の女房ことば、武者ことば、外来語	『海人藻芥』、『大上臈御名之事』、『御湯殿上日記』、『日葡辞書』の婦人語、『女重宝記』、忌みことば、ポルトガル・スペイン語
15	庶民の文化、栄える(近世)	時代背景、近世初期の上方の資料、近世前期、近世初期の上方の資料、近松門左衛門の人形浄瑠璃『曾根崎心中』、近世前期の東国資料、近世後期	井原西鶴、松尾芭蕉、近松門左衛門、世話物、時代物、『醒睡笑』、『きのふはけふの物語』、『かたこと』、道行、『雑兵物語』、『三河物語』、洒落本、黄表紙、合巻、滑稽本、人情本、『浮世風呂』
16	「こんにつた」「ねんぶつと」	連声、拗音、連母音の融合と開合の区別、四つ仮名の合流	漢字音、開拗音、合拗音、母音連続、オ列長音「開音」「合音」、江戸語、『蜷縮涼鼓集』
17	一段化、完了!	二段動詞の一段化、近世前期の一段化率、ナ行変格活用(四(五)段活用化、条件表現(仮定))	上二段、上一段、下二段、下一段、坂梨隆三、一段化率、四段活用、五段活用、「已然形+ば」、確定条件、恒常条件、偶然確定、必然確定
18	武士・江戸っ子・遊女のことば	近世の位相におけることばの違い、『夢酔独言』における江戸っ子(男性)のことば、遊女のことば、近世の外来語	武士のことば、町人のことば、『浮世風呂』、『夢酔独言』、ありんすことば、『解体新書』、杉田玄白、蘭学

NO	講名	項目	キーワード
19	国学者たち	文語文法（国文法）、近世の国学へ、契沖から賀茂真淵、本居宣長へ、動詞活用の研究史	雅文、『手爾葉大概抄』、国学、契沖、本居宣長『てにをは紐鏡』『詞の玉緒』、富士谷成章『かざし抄』『あゆひ抄』、本居春庭『詞の八衢』、鈴木朗『言語四種論』『活語断続譜』、東条義門『友鏡』
20	文明開化（近代）	時代背景、資料、録音資料、新しい文字—ローマ字、ローマ字表、第1表・第2表	速記本、徳川慶喜、『昔夢会筆記』、『旧事諮問録』、三遊亭円朝、仮名垣魯文『牛店雑談安愚楽鍋』、坪内逍遙『当世書生気質』、僕、吾輩、書生の言葉、蠟管、SPレコード、羅馬字会、ヘボン式、日本式、訓令式
21	君、近代のことばを学びたまえ	書生ことば、女学生のことば—「てよだわ」ことば、文体の形成、翻訳の影響	一人称代名詞「僕」「わがはい」、二人称代名詞「君」、命令表現「たまえ」「べし」、あいさつことば「失敬」、漢語、外来語、口語文、文語文、文体改革、尾崎紅葉、「である」調、山田美妙、「です」調、嵯峨野屋おむろ、「であります」調、言文一致運動、受身文、非情物名詞句、他動詞文、欧米語
22	吾輩のウォッチであとテンミニッツ	明治期の新漢語と漢語ブーム、漢語ブームが起こった理由、漢語ブームに対する意識、外来語、外来語の漢字表記	和製漢語、新漢語、中村正直、西周、『童蒙必読漢語図解』、『都鄙新聞』、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語
23	現代にも起こっている変化	時代背景、現代語における変化、現代仮名遣い、ら抜きことば、さ入れことば・れ足すことば	方行鼻濁音、平板アクセント、「じゃん」、「ちがくて」「ちがかった」、表音表記、可能表現、上一段活用、下一段活用、カ変動詞、「～せていただく」
24	「標準語」はつくられた？	室町時代末期・江戸時代初期の「標準語」、江戸語の形成、近世の方言辞書、標準語の形成	ロドリゲス『日本大文典』、国郷談、ワ行四段動詞の音便、『浜荻』、『尾張方言』、『御国通辞』、道二翁道話、方言撲滅運動、ラジオ放送、国定教科書
25	発音の変化のおさらい	母音の変化、子音の変化	上代特殊仮名遣い、ヤ行・ア行「エ」、ワ行「エ」、ア行「オ」、ワ行「オ」、合音、開音、オ列長音、サ行音、タ行音、ハ行音、ハ行転呼音、『音曲玉淵集』、『改修捷解新語』

NO	講名	項目	キーワード
26	「おほね」から「だいこん」へ	漢語の増加、漢語の日常語化—和製漢語・湯桶読み・重箱読み、漢語の日本語化、漢字音	和語、仏教用語、和製漢語、音便化、長母音化、韻尾の脱落、呉音・漢音・唐音
27	日本語の分析的傾向	日本語の分析的傾向、論理的な表現へ—条件表現、文法化、文法化の特徴	推量表現、打消意志、打消推量、打消の過去、未然形＋ば、已然形＋ば、「たら」「なら」「ば」、「と」「ので」「たら」、意味の漂白化、脱範疇化、形態的縮約
28	古代語に「です」「ます」はなかった	敬語の分類、素材敬語から対者敬語へ、自敬表現、絶対敬語から相対敬語へ、敬意遁減	尊敬語、謙讓語Ⅰ、謙讓語Ⅱ、丁寧語、美化語、王者のことば、敬意遁減の法則、貴様
29	頼み方、謝り方の歴史	発話行為、依頼表現に使われる言語形式、命令表現に使われる言語形式、平安時代の謝罪・断り表現の歴史	人間関係の調整、発話機能、聞き手の身分、敬語、定型の前置き表現、配慮、動詞の命令形、否定疑問形、対人配慮、事情説明
30	こ・そ・あ	現代語の指示詞の用法、古代語の指示詞、カ行（Kの系列）とサ行（Sの系列）の対立、いつソ系列は直示用法を獲得するのか、曖昧なソ	コ系（列）・ソ系（列）・ア系（列）、カ系列、カク系列・サ系列、指示代名詞、指示副詞、直示用法、照応用法、観念用法

これから30講にわたって、日本語の歴史について学んでいきます。そこでまず、この講で基本となることについて確認しておきましょう。

時代区分

本書では、時代区分を【₁_____】・【₂_____】・【₃_____】・【₄_____】・【₅_____】・【₆_____】の6分法としていきます。なお、【₁_____】は奈良時代以前、【₂_____】は平安時代、【₃_____】は鎌倉・室町時代、【₄_____】は江戸時代、【₅_____】は明治時代から戦前、【₆_____】は戦後から現在をさします。

【₁_____】【₂_____】については、日本史や日本文学史ではまとめて【₇_____】としているものも多いのですが、本書では日本語史研究で多く用いている区分に従い、奈良時代以前を【₁_____】、古典語として後の時代に規範となる平安時代を【₂_____】とよびます。

日本語を知る資料

日本語を知る資料として、主となるのは「₈_____」です。これについて、古くは木簡や金石文といった木や金属に刻まれたものが見られますが、多くは手で書かれたもの（墨書）や、印刷された紙の資料に見られます。そのほかに音声として残されているものもあります（芸能の詞章や声明、そして近代以降の録音資料等）。

そして、日本語史の資料は【₄_____】前期まで、ほぼ京都・奈良・大阪を中心とした畿内のものになります。これは、1000年近く朝廷が奈良・京都に置かれ、これらの地域のことばが中央語として残っているためです。なお、畿内以外のことば（方言）については、特に古い時代の資料は乏しいのが現状です。

注

松村明編（1977）『講座国語史1 国語史総論』大修館書店、小林賢次・梅林博人（2005）『日本語史探究法』朝倉書店、野村剛史（2010）『話し言葉の日本史』吉川弘文館、等参照。

解説

木簡

文字等を書き記した木片。

金石文

鉄剣名・造像銘・石碑等、金属や石に刻まれた文章。

しょうみょう 声明

ほうえ
法会で僧によって唱えられるもの。宗派によって種々の声明があります。

また、関東のことばに関しては【₄_____】後期以降、江戸が力をもつようになり、出版物も多く出されるようになったことから、それら(滑稽本等)の中に、江戸のことばが見られるようになります。

話しことばを探る

日本語は、「₉_____」と「₁₀_____」に距離があるといわれています。【₂_____】では距離がなかったといわれていますが、【₃_____】以降その距離は次第に大きくなり、(言文一致が起こる前の)【₅_____】初期には、その両者の距離ははなはだしいものでした。

さて、日本語史においては、「₉_____」と「₁₀_____」の両者とも研究の対象となってきましたが、基本的には「₉_____」を中心としています。そこで、各講ではこの「₉_____」の資料を主に紹介していきたいと思います。

ここで、なぜ、「₉_____」を中心とするのかについて、少し述べておきたいと思います。「₉_____」は時間の流れの中で少しずつ変化し、それが重なり大きな変化が起こります。それに対し、「₁₀_____」は書かれたものが残り、それが規範化されて体系が確立し、そして新たな時代の人々もそれを真似しようとします。

このように「₉_____」は言語変化を反映するのですが、「₁₀_____」はそうではなく保守的です。そこで、言語の変化を明らかにするためには、出来る限り「₉_____」に近いと考えられる資料を調査対象として選んでいくというわけです。

日本語はいつから？

日本語はいつ頃から使われ始めたのでしょうか。実はよくわかっていません。『魏書』東夷倭人条(通称「魏志倭人伝」)(3世紀末)の中には、「卑弥呼」「壹与」「卑狗」等、官名・人名等を漢字で音訳したものの数語が見られます。

解説

『魏書』

中国の正史で、554年に成立した中国24史の1つ。なお、「卑狗」(長官)・「卑奴母離」(副官)・「爾支」(長官)等が見られるのですが、読み方は定まっていません。

▶あしがき

30 講続いた日本語の歴史の旅、いかがでしたか。

それぞれの時代ごとに特色がありますが、人々のことばの使い方や、ことばに対する考え方は、現代と通じるように感じられたところもあったのではないのでしょうか。

本書で紹介した日本語の歴史は、基礎的なところにすぎません。

日本語の歴史に興味を持った方は、さらに深く勉強してみてください。

解説や注で示した文献を、興味のあるところから実際に読んでみることをおすすめします。

▶用例出典

本書の用例は、以下のテキストを参照しました。以下に記載のないテキストは『新編日本古典文学全集』（小学館）によるものです。ただし、読みやすさのため、本文を改めたところがあります。

続日本紀：青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸（校注）（1989-1998）『続日本紀』新日本古典文学大系 12-16、岩波書店

藤原定家本土佐日記：（1928）『土佐日記』尊経閣叢刊、育徳財団、国立国会図書館近代デジタルライブラリー

三宝絵詞：馬淵和夫・小泉弘・今野達（校注）（1997）『三宝絵 注好選』新日本古典文学大系 31、岩波書店

好忠集・為忠集：「新編国歌大観」編集委員会（編）（1983-1992）『新編国歌大観』角川書店

湯山聯句鈔：大塚光信・尾崎雄二郎・朝倉尚（校注）（1995）『中華若木詩抄 湯山聯句鈔』新日本古典文学大系 53、岩波書店

海人藻芥：続群書類従完成会（1959）『群書類従』28、八木書店（訂正3版）

大上臈御名之事：続群書類従完成会（1960）『群書類従』23、八木書店（訂正3版）

貴船の本地：萩野由之（1901）『新編御伽草紙』誠之堂書店

天草版平家物語：近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ（編）（1999）『天草版平家物語 語彙用例総索引（1）』勉誠出版

エソポのファブラス：大塚光信・来田隆（編）（1999）『エソポのハプラス 本文と総索引 本文篇』清文堂出版

日葡辞書：土井忠生・森田武・長南実（編訳）（1980）『邦訳日葡辞書』岩波書店

日本大文典：土井忠生（訳注）（1955）『日本大文典』三省堂出版

大蔵虎明本狂言：池田廣司・北原保雄（1972-1983）『大蔵虎明本狂言集の研究』表現社

狂言六義：北原保雄・小林賢次（1991）『狂言六義全注』勉誠社

蜷縮涼鼓集：鴨東藪父（編著）（1979）『蜷縮涼鼓集』駒沢大学国語研究資料第1、汲古書院

古事記伝：大野晋・大久保正（編集校訂）（1926）『本居宣長全集』9、筑摩書房

仮名遣奥山路：正宗敦夫（編纂校訂）（1929）『仮字遣奥山路』日本古典全集刊行会

浮世風呂：神保五彌（校注）（1989）『浮世風呂 戯場粋言幕の外 大千世界楽屋探』新日本古典文学大系 86、岩波書店

辰巳之園：水野稔（校注）（1958）『黄表紙 洒落本集』日本古典文学大系 59、岩波書店

醉姿夢中・短華葉集：洒落本大成編集委員会（編）（1978-1988）『洒落本大成』中央公論社
 道中粹語録：水野稔（校注）（1958）『黄表紙 洒落本集』日本古典文学大系 59、岩波書店
 女重宝記：日本私学教育研究所（1985）『日本私学教育研究所 調査資料 第122号』
 蘭学事始：片桐一男（2000）『杉田玄白 蘭学事始』講談社学術文庫
 夢酔独言：勝小吉（著）・勝部真長（編）（1969）『夢酔独言』東洋文庫 138、平凡社
 道二翁道話：石川謙（校訂）（1935）『道二翁道話』岩波文庫
 昔夢会筆記：渋谷栄一（編）（1966）『昔夢会筆記 徳川慶喜公回想談』東洋文庫 76、平凡社
 旧事諮問録：進士慶幹（校注）（1986）『旧事諮問録 江戸幕府役人の証言』岩波文庫
 当世書生気質：坪内逍遙（2006）『当世書生気質』岩波文庫
 和蘭文典読法：松村明・古田東朔（監修）（2000）『和蘭文法書集成』11、ゆまに書房
 吾輩は猫である：夏目漱石（1965）『漱石全集』1、岩波書店
 三四郎：夏目漱石（1966）『漱石全集』4、岩波書店
 多情多恨：尾崎紅葉（1993）『紅葉全集』6、岩波書店
 胡蝶：『山田美妙集』編集委員会（編）（2012）『山田美妙集』1、臨川書店
 野末の菊・浮雲：中村光夫（編）（1971）『二葉亭四迷・嵯峨の屋おむろ集』明治文学全集 17、筑摩
 書房
 破戒：島崎藤村（1966）『藤村全集』2、筑摩書房
 坑夫：夏目漱石（1966）『漱石全集』3、岩波書店
 口語法別記：国語調査委員会（編纂）（1917）『口語法別記』文部省
 童蒙必読漢語図解：松井栄一・松井利彦・土屋信一（監修）（1995）『明治期漢語辞書大系』5、大
 空社
 都鄙新聞：至誠館（1868）『都鄙新聞』
 伏見天皇宸記：増補史料大成刊行会（編）（1965）『増補史料大成』3、臨川書店
 痴人の愛：新潮社（1970）『谷崎潤一郎集』新潮日本文学 6
 桜の実の熟するとき：島崎藤村（1967）『藤村全集』5、筑摩書房
 二十四の瞳：壺井栄（1997）『壺井栄全集』5、文泉堂出版

▶掲載図版一覧

- 12 ページ 稲荷山古墳出土鉄剣銘（埼玉県教育委員会）
- 13 ページ 神字日文伝
- 21 ページ 天平勝宝九年瑞字宣命（正倉院蔵）
- 33 ページ 石山寺本大智度論：『石山寺本大智度論古點の國語學的研究』（大坪併治（2005）、風間書
房）より
- 57 ページ 方丈記〈大福光寺本〉（京都国立博物館蔵）
- 61 ページ 天草版平家物語（大英博物館蔵）
- 85 ページ 詞の八衢
- 85 ページ てにをは紐鏡
- 87 ページ 牛店雑談安愚楽鍋（国立国会図書館蔵）

※引用元が記載されていないものは、『資料 日本語史』（沖森卓也編（1991）、おうふう）より

▶著者紹介

岡崎友子 (おかざき ともこ)

1967年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。大阪大学助手、就実大学人文科学部准教授、東洋大学文学部教授等を経て、現在、立命館大学文学部教授。専門は日本語史。著書・論文に、『日本語指示詞の歴史的研究』(ひつじ書房、2010年)、「指示詞系接続語の歴史的变化—中古の「カクテ・サテ」を中心に—」(『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版、2011年)、「現代語・中古語の観念用法「アノ」「カノ」」(『バリエーションの中の日本語史』くろしお出版、2018年)などがある。

森勇太 (もり ゆうた)

1985年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員、関西大学助教・准教授を経て、現在、関西大学文学部教授。専門は日本語史。著書・論文に、『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』(ひつじ書房、2016年)、「中世後期における依頼談話の構造—大藏虎明本狂言における依頼—」(『歴史語用論の方法』ひつじ書房、2018年)、「近世後期洒落本に見る行為指示表現の地域差—京・大坂・尾張・江戸の対照—」(『日本語の研究』15-2、日本語学会、2019年)などがある。

ワークブック 日本語の歴史

2016年10月10日 第1刷発行

2021年4月1日 第3刷発行

著者.....岡崎友子・森勇太

発行.....株式会社 くろしお出版
〒102-0084 東京都千代田区二番町4-3
TEL 03-6261-2867 FAX 03-6261-2879
URL <http://www.9640.jp> email kurosio@9640.jp

印刷所.....株式会社 三秀舎

本文・装丁デザイン.....工藤亜矢子・伊藤悠 (OKAPPA DESIGN)

©OKAZAKI Tomoko and MORI Yuta 2016 Printed in Japan

ISBN 978-4-87424-706-8 C1081

●乱丁・落丁はおとりかえいたします。本書の無断転載・複製を禁じます。

辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比埜

其兒多加利足尼其兒名弓已加利獲居

其兒名多加披次獲居其兒名多沙鬼獲居

其兒名半弓比

(現代語訳)

月	日	学籍番号		氏名	
---	---	------	--	----	--